
カナリアの妹

鳥瀬介

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

カナリアの妹

【Nコード】

N1350K

【作者名】

鳥瀬介

【あらすじ】

そして少女は、ナラク橋の上から飛び降りていった。

「見たかったなあ お日様」

そう言い残して。

翌日。僕はその少女と再会した――。

現実とちよつと違う異世界での物語。

「カナリア」と呼ばれる子供たちを搾取する事で反映する工業都

市。

その都市では、「ホメオスタティック・ボトル」という万能医療器具の部品生産で栄えていた。

一見、平穏な生活を送る人々。

しかし時の流れのうちに、人を生かす為に作られたはずのシステムは、

受胎の仕組みを悪用し、胎児を医学的に搾取するという、身の毛のよだつ仕組みを生み出していたのだった。

ナラクと呼ばれる橋の上で、一人の少年の身に起きた奇妙な出会いと衝撃的な別れ。

はたして、身を投げた少女の正体は。

謎の娘が述べた「カナリアシステム」とは、いかなるものか。

そして、「カナリアの妹」の運命は。

〈第一部〉 1：親父を迎えに「表紙&挿絵 x 4」（前書き）

この小説に残酷描写は一切ありませんが、設定上、妊娠や出産に関して、いささかきつい表現が背景描写として描かれます。

その点だけどうか、ご留意して頂いた上で後閲覧下さい。

〔第一部〕 1：親父を迎えに「表紙& a m p ;挿絵 x 4」

— * — * — * —

> i 5 8 0 7 — 8 4 8 <

— * — * — * —

家の近所にあるナラクという古い石橋は、川の上に架かっているらしい。

らしい、と言うのには訳がある。

橋の上から下を覗き込んでも、川なんて見えないからだ。

子供の頃の僕は、大人の背丈の半分しか世界を知らなかったから、いつも下を見て歩いてきた。

それでよく、ナラク橋の欄干によじ登って下界を覗き見た。

4

ナラク橋は、狭い峡谷の間にかかっている。

労働者向けの集合住宅が軒を連ねる右側の岸と、工業地区がある左側の岸が、

角度を増しながら落ち込んでいくと、もやっとした黒い線へ吸い込まれていく。

底は闇。それしか見えない。

> i 5 5 9 2 — 8 4 8 <

いくらまっすぐに下を見下ろしても、川なんて全然見えなかった。

渓谷は狭すぎて、なかなか日の光が射さないし、

太陽が真上に来て、なぜか真っ暗なままだった。

大地に切れ目を入れて、黒い綿を敷き詰めたよう。
音もしない。匂いもしない。

”そこに何かがあるのか誰も知らない”という、
背中がゾクゾクするような感覚――。

僕はそれが好きだった。

大人達はあそこに川が流れてると言うけれど、
本当は、誰も川が流れてる所を見た訳じゃない。
ただ昔から、あすこの下には川がながれてるんだと、
代々そう言い伝えられて来ただけなんだ。

そこに何かがあるのか誰も知らない。

僕はする事が無い時はいつも、

ナラク橋から黒い闇を眺めていた。

> i 5 5 4 1 — 8 4 8 <

ところで僕は、奇妙なものを見たことがある。

6歳の時。

それは真夜中だった。

僕は毎晩、工業地区の繁華街と家を往復していた。

工業地区の中央にそびえる大きな工場を取り囲む分厚い壁の外
側には、

飲み屋や小料理屋がずらっと並んでいた。

数えたことはないけど、たぶん、飲み屋だけで30軒以上はあつ
たと思う。

僕の親父は仕事が終わると、その30軒のどれかに入って出てこ
なかつた。

ひどい時は、その日の手当を全部飲んでしまう事もあった。
それを防ぐには、なるべく早く親父を見つけ出して連れ帰るしか
無かった。

そして、その役をやらされるのは、いつも僕だった。

「あの宿六をとつとと連れておいで！」

母さんはいつも怒鳴りつける。まるで僕が悪いみたいに。

でも、親父も僕に見つかるのが嫌なものだから、毎日店を変えて
いた。

だからなかなか見つからない。

やっと見つけだしても、まず素直に帰ってきてくれる事はなかつ
た。

> i 5 6 3 7 — 8 4 8 <

その夜は20軒くらい回った。

タバコの煙、ガラガラしたわめき声。ヤニで文字盤が曇った古い
時計。

空いたテーブル。皿の上の串焼きのくし。まだ肉が3切れ残つて
る。

アハアハと誰かが馬鹿笑う声。洗い物ががちゃがちゃとぶつかる
音。

親父は隅の席で独り、黙って飲んでいた。
いつもそう。

親父は凄く不機嫌だった。右の眼の上に、葉っぱみたいな形のア
ザが出来ている。

パーの手でぶたれた様な後だ。いつもはグーなのに。

あるいは女の人にチョツカイでも出したのかもしれない。

見つけるのが遅れてしまった日は、すっかり骨の髄までアルコールが入ってる。

良くてげんこつ。悪ければ店からケリ飛ばされる。

その日は両方。

> i 5 6 4 7 — 8 4 8 <

読めない字で書かれたノレン。親父の背中。
ぴしゃりと乱暴に閉まった扉。まるで僕が悪いみたいに。

帰ってくれないのは、親父がそうしたいからだ。

それでいて、家に帰ると怒られるのは、いつも僕なんだ。

子供って生き物は、ほんと割に合わないや。

帰りの足取りも重くなる。

その日の晩ご飯は、おかゆと葉っぱを重ねた様な漬け物だった。

その頃は特に家が貧しく、晩ご飯のおかずは少なくなる一方だった。

皿の上のくし。まだ肉が三切れ残ってるー。

お腹がグウと鳴った。

店員が見てない時に、あの残った肉をそつと食べちゃったらどうなるんだろつ。

本当は全部残さず食べてあってもおかしくないのだから、

残りを僕が（いや）、誰かが食べてしまっても、

べつに悪い事にはならないんじゃないだろうか？。

そんな事を考えてるうちに、ナラク橋に差し掛かった

くつづく

〈第一部〉 1：親父を迎えに「表紙&挿絵 x 4」（後書き）

だいぶ前に書いたショート・ショートを下地に大幅にリライトした物です。

去年立ち上げたオリジナル創作&イラストのサイト向けに書き始めたのですが、

なかなか終わらなくて・・・（汗）、モチベーション維持の為、ひとまず途中までを公開いたします。

ジャンルとしては、幻想小説とSFの中間くらいでしょうか・・・とりあえずハッピーエンドを目指しています。（一応・・・）

文量としては短編小説の範疇と思いますが、なにぶんまだ書き終わっていないので連載とさせて頂きます。

ここはおかしいだろ！、みたいなツツコミがありましたら、お暇なときにでも、ぜひぜひお願いしたいところであります。

医療に関する情報とか、必要に応じてウィキペディア等を資料に使わせて頂いてますが、何ぶん頭悪くて高度な設定構築が出来ませ
ん・・・orz

小説つてむずかしい。みんな高度な知識を駆使してて凄い・・・
そんな気分です。（遠い目）

こんなへたれな私ですが、一生懸命書きますので、
ご縁あれば、ひとつお付き合いの程、よろしくお願いいたします。

というわけで、頑張ります！。（敬礼）

鳥瀬介 2010 - 3 / 4

*追記：2010 - 3 / 29

服の色と挿絵が合わない点と、

・・を に、？や！の後を一文字開ける常套作法にそって書かれていない点をご指摘頂きましたので、本文の該当部分を修正しました。

他にも何かおかしな所等ありましたら、教えていただけると本当にありがとうございます。

2：ナラク橋の少女「挿絵 x 8」

ナラク橋は、街で一番大きな橋だった。

渡りきるまでには、それなりに歩く必要がある。

夜中。ナラク橋に街頭は少ない。

真ん中と、両端の三本だけ。

だから、橋の上にいたのが僕一人じゃない事に気付くのに、少し時間がかった。

> i 5 6 7 5 | 8 4 8 <

僕はまだ小さかったから、夜中の道に誰か知らない人が立っていたら、きつと用心したはずだ。

でも、その人影はずいぶんと小さかった。

僕と同じ いや、少し大きいくらい。

だからあまり怖いとも思わず、歩くのは止めなかった。

その人影は、向こうに行くでも無く、こちらへ来るようすもなかった。

じっとしているみたいだ。

> i 5 6 7 6 | 8 4 8 <

近づくとだんだん様子が見えてきてー！。

やっぱり子供だ。

迷子かな？。

僕は、すれ違えるように端っこへ寄った。

車2台が楽にすれちがえる幅の橋で、そんな事をする必要は無か

ったのだけれど。

その人影は、橋の真ん中辺りに立っている。
大きく切れ込みの入った袖、百合の花を逆さに伏せた様なスカート。

女の子だった。

得体の知れない人物とは、絶対に目を合わせるべきじゃない。
大人なら誰でも持つてる分別を、幼い僕はまだ持ち合わせていなかった。

青白く光る顔。辺りはこんなに暗いのに。

僕は、その女の子の瞳に視線を引き寄せられた。

「こんにちは」

不意に声をかけられた。

「こんにちは」

僕は挨拶を返してから、

「いま夜だよ。だから、こんばんわだ」と、付け加えた。

女の子はきょとんとしている。

「そう。今は”よる”なんだ。知らなかった」

「よる だと思うよ。外が真っ暗なもの」

「”そと” って、なあに？」
もう。

この女の子は頭が悪いのかな？。

「だから そのお、”せかい”さ。」

世界が真っ暗だから、”よる”なんだ」

女の子は、まだ不思議そうな顔をしている。

「世界が真っ暗なのは、当たり前前の事じゃない。それとも、暗くない時でもあるって言うの？」
まったくもう。

この女の子の言ってることは訳が分からない。
僕は、この変な子にも判るようにと、考えながら答えた。

「だって 朝になれば明るくなるでしょ。昼になれば、もっと明るくなるし」

「どおして？」
どづしてって言われても、何とさえいいのかな。

「お日様が昇るから」
そこで女の子はケタケタと笑い出した。

「そうか、ここではお日様が昇るんだ。そうか、うふ、うふふ、あつはつははは」

僕は、女の子の笑い方が、なんだか普通じゃ無いように思えた。

> i 5 6 6 5 | 8 4 8 <

こんな事を言っではいけないと思うけど、気が狂ってると思ったんだ。

だから僕はじりじりと、その場を離れた。

もう何も話しかけてこない。僕は背を向けて歩き出した。

女の子の白い影は、視界の隅にやけに残った。

たぶん、まだその場に立ったままにいると思うけど、

なんだかそつと後ろからついて来てるような気がした。

だから、また女の子に声をかけられた時、僕はどきりとした。

「ねえ、君」

「。。。なあに？」

僕は振り返った。

女の子は同じ場所に居る。

返事は返したけど、足は止めなかった。ちよつと後ずさつてる。

僕は帰らなきゃ行けないんだと、女の子に気付いてほしかった。

女の子は言った。

「お日様、あとどれくらいしたら昇ってくるの？」

小さいけど、胸に突き刺さすように響く声。

「あと？、あと、お日様が？。うーんと」

この女の子は頭がちよつと変だけど、

それでも、自分より大きな子に頼りにされるのは、ちよつぴり嬉しかった。

僕は飲み屋を追い出された頃の時刻に、ここまでかかった時間を足して、一生懸命考えた。

今、11時を少し回ったぐらいだから、

「あと5時間。いや、6時間だ。それくらいだよ。たぶん」

「そっか」

ふいに女の子の表情が曇った。

> i 5 7 0 8 | 8 4 8 <

ぶいっと横を向くと、両手を後ろに組んで歩き出した。

一歩踏み出すことによるける、少し奇妙な歩き方だった。

裸足？。

僕の立ってる側の橋の欄干まで来ると、背中をもたれかけた。

スカート裾がふわりと寄り添う。
女の子は、ぼんやりと光る街灯を見上げた。

> i5734 — 848 <

何か真剣な事を考えている。
何かを諦めてぼおっとしている。
そのどちらにも見える表情。

その時になつて僕は、少女が思いのほか美しい事に気が付いた。
街頭の黄色い灯りが、青白い顔につかの間、
うつすらと生気を垣間見せたからかもしれない。

少し、間。
僕は、歩みを止めていた。

「見たかったなあ お日様」
もう二度とお日様を見れないか、
今まで一度も、お日様を見たことが無かったのか、
どちらかの意味に聞こえた。

ただそれは、今になつて思うことで、その時はただ、
「朝になれば見えるよ」
と、ぶっきらぼうに答えただけだった。
馬鹿馬鹿しいおしゃべりだと思った。
だってそうじゃないか。

家へ帰りベッドに入り、目が覚めれば、お日様なんていくらでも
見れるのに。

> i5077 — 848 <

女の子はゆっくりと首をふった。

「もう、行かないや」

そして女の子は、橋から飛び降りた。

僕はあっけにとられた。目の前で起きてる事の意味が判らなかつた。

我に返り、欄干から身を乗り出すと、下を見た。

> i 5 7 7 4 | 8 4 8 <

一輪の白い花の様な円が、

少しづつ少しづつ、小さくなって、

そして闇に吸い込まれて、見えなくなってしまった。

> i 5 7 5 2 | 8 4 8 <

その後、僕が取った行動はよく覚えていない。

ただ気が付くと、ベッドの中でがたがたと震えていたように思う。

次の日。

僕は女の子と再会した。

あの橋で。

〜っづ〜

3：再会

その日は日曜日だった。すでに日は高い。

工業地区と労働者用の住宅街を結ぶナラク橋は、平日は仕事に向かう人々で、休みの日は商店へ食事や買い物に出かける家族連れでごったがえす。

頭の上を、沢山のおしゃべりが通り過ぎてゆく。

全ての人達が楽しそうに過ごしていた。僕一人を除いて。

僕は、シラフに戻った親父に連れられて、お昼に連れて行ってもらう所だった。

滅多に無いことだった。

いつもだったら大はしゃぎで駆け回るところなんだけど。

二人ともずっと黙っている。家からずっと。

僕は下を見て歩いていた。家からずっと。

その女の子は、両親（と思う）の間に立ち、反対側から歩いてきた。

親は二人とも、車輪のついた大きな鞆を引きずっている。

それぞれ空いてる手で女の子と手をつないでいた。

女の子ー！。

うきうきとした笑みを常に絶やさない。バラ色の頬。

僕は顔を上げずに、眼だけを動かして彼女を見た。

確かにあの女の子だ。

服も同じ。髪も同じ。顔も同じ！。。

間違いなく、昨日の夜ナラク橋から飛び降りたあの女の子だった。

でも。でも。どうして？。
どうしてここに居るんだ???

頭の中で、巨大な鐘ががんと打ち鳴らされていた。
何か、もの凄くおかしいことが起きている。

それは、絶対に放っておいてはいけない事な気がした。

女の子と両親はすれ違って、視界の隅に消えていった。

鐘の音がどんどん大きくなる。世界中で僕にしか聞こえない音。

僕は立ち止まり、振り返って親子を見た。

3人の姿に、何も変な所は感じなかった。

父親は、複雑な模様がふちに縫い込まれた膝下まである灰色のコート。
母親の方は、ゆったりとした白いスカートに深紅のジャケット。

背中が丸く空いていて、そこから黒いブラウスが見えている。

女の子も、近所の女の子達が普段着てる様な服じゃない。

腰から裾へ向かってふわっと広がるスカートは、昨夜見たような病人の様な青白さではなく、

太陽を受けてきらきらとオレンジの光を跳ね散らしていた。

僕には、どこか遠くへバカンスに出かける親子の姿にしか見えなかった。

あれはきつと、よそ行きの服だ。凄いお金持ちの。
というこは。

昨日見た女の子は、よそ行きの服を着ていたんだ。

僕は、橋の欄干を見た。女の子が飛び降りた場所は、確かあの辺

ー。

あの女の子は、お出かけ用の服を着て、そして 行ってしまった。
いや、違うー！。

僕は強く首をふった。

それなら、今あそこにいるのは”誰”なんだ？。

鐘の音。鐘の音。鐘の音ー！。

よし！、調べてやろう。

僕は親父を見た。

ぺちゃんこの帽子。薄っぺらい生地のかたびれたコート。裾が風
になびいてー！。

橋の上をのんびりと歩いていく。僕が側にいない事に気付いてな
い。

げんこつはまだ飛んできそうもない。まだ、すぐには。

僕は親子の方へ向き直ると、走った。

すぐ目の前を巨大な尻が塞いでいた。僕はよけ損ねて肩がぶつか
った。

重さのある紙袋がばさつと落ちる音。

飛んでくる女性の声。このくそがきとかなんとか。

僕は気にしてられなかった。

親子のすぐ後ろまで追いついた。

はあ はあ。

胸が凄くドキドキする。

別になんでもない事だったらどうしよう。もの凄くばかみたいな
勘違いをしていたら。

鐘ー！、鐘ー！、鐘ー！、鐘ー！。

つばを飲み込んだ。目を閉じて――。

「ねえっ」

女の子は気付かない。

「ねえったら！、その君！」

まず両親が気付いて、こちらを振り返った。

つないだ手が後ろに引かれて、女の子も立ち止まり、こちらを見た。

やっぱりそうだ！。

昨夜の女の子だった。完全に！。

膝の下からすーっと力が抜けて、ちゃんと立っているのが難しくなった。

生きていた！。生きていたんだ！。

よかった。本当によかった。

でも、頭の鐘は鳴り止まなかった。

何かが変なんだ。

でも、何かって、なんだ？。

くっくくく

4：親子

「ぼうや、何か用かね？」
と、父親。

相手が小さな子供とあつて、穏やかな表情をしている。つんと横に伸びたヒゲ。

少し、間。

母親がかがんで、女の子に小声で話す。

「あなたのお友達？」

母親を見上げて、首を傾げる女の子。

変だ。何かが凄く変だ。

父親が、えへんと咳払いした。僕は、いたずらを見つけたときのように飛び上がった。

何か言わなきゃ。

「あの！ ええと。あそこ！」

僕は指差した。昨夜、女の子が飛び降りた欄干を。

振り返る3人。

人ごみの隙間から覗き込むように伸び上がって父親が眺めた。

「あそこが、どうかしたかね？」

何かを落としたのかな？、そんな風にしか思っていないようだ。

だめだ、ちゃんと説明しないと、この人たちには判らない。

僕は戸惑いはじめていた。

なぜって、

たしかにあそこから飛び降りた本人が、まるで何も反応を示さないからだ。

「君！。君、そのお、僕と会ったよね。ここで」

母親は、僕をじつと見ていた。
奇妙な目付きだった。壁の向こうにあるものを観察しようとする
ような。

女の子は、大きな青い眼を閉じたり開いたりしている。
あっけにとられてる顔。まるで訳が分からないという感じだ。

おかしい。

僕を見るあの子の眼、まるで初めて会った人を見てるみたいだ。
僕は、自分を見下ろした。

ぺらぺらの安っぽいジャケットに横縞の入ったシャツ、麻布のズ
ボン。

頭には親父のお下がりのぶかつく帽子をかぶっている。
昨日の夜とまったく同じ格好だった。

似た様な格好の子供は他にもいるけど、そう見間違えるとは思え
ない。

君、あそこから、橋の上から飛び降りたじゃないか！。なぜ
生きてるの？。ここにいてるの？。

僕は、そう聞きたかった。でも、
口から出てきた言葉は、そうじゃなかった。

「君、だから、その、ええと、僕の事知ってる？」
女の子はゆっくりと首を振った。昨夜と同じように。

「ごめんなさい。あなたの事、あたし知らないの」
そんな馬鹿な！。
いや、まてよ。

「あの、君にはお姉さんがいる よね。じゃなきゃ妹が」
そうだ。そうだったんだ。

どうして気づかなかったんだらう！。
きつと年の近いお姉さんか妹がいるはずだ。だから。

女の子は、きょとんと目を見開いたままだった。そして、また首をふった。はっきりと。母親が答えた。

「ねえ坊や。この子はね、一人っ子なの」
一人っ子なの、やけに一語づつ、はっきりと。

たいへんだ。

体中の血が、背中からさあーと抜けていくのが判ったと、言うことは、つまり。

頭上から、えへんと咳払い。

「人違いのようだね」

と、父親。あきらかに怒るのをこらえてる様子で。女の子は母親を見上げた。

ねえ、どうすればいいの？。

そんな風に助けを求める視線。

母親はぴしりと言った。

「用事がないのならどいて頂けるかしら」
僕はうなだれると、しおしおと脇へどいた。

母親が素早く、行きましようと言つと、3人はそろって歩き出した。

僕は何も言えずに見送った。

橋を渡りきった頃、母親がこちらを振り返った。

僕がまだ見てるのに気付くと、父親に何か言った。

父親が、明らかに怒った顔で僕を睨めつけた。

僕は目をそらした。

視線を戻すと、親子は小走りで通りを進んでいた。

やがて、人ごみにまぎれて見えなくなった。

僕は途方に暮れていた。

ようするに、ようするに。

あれは全部、夢だったの？。

昨夜、ナラク橋から飛び降りた女の子。

そして、僕の事を知らないと言った女の子。

別人だった。

声がまったく違ったのだ。

昨夜の女の子は、乾いた響きのどこか大人びた声だった。

今の女の子は、もっと温もりがあつて小鳥みたいに可愛らしい声だった。

でも、姿形はまったく一緒だった。

似てる人つてのは、時々いるけど、

背格好から髪型、そして着てる洋服まで同じなのに、別人だったなんて。

夢でも見たんだと考えるしかしようがなかった。

頭の中で打ち鳴らされていた鐘は、もう止んでいた。

凄く大きなため息をつく。大人がするみたいに。

でも、これで良かったんだ。

結局僕は、人が死ぬ所を本当に見た訳じゃなかったんだから。

それは途方も無い安らぎだった。

何も心配する必要は無いし、不安になる事も無いんだー！。

そう判ってはいた。いたんだけど。

子供には到底与えられっこない大きな役目を、いきなり取り上げられた様な寂しさを感じた。

僕はその場に立ちつくしていた。

そして、

すっかり忘れていたある事に直面した。

くっづくく

5：お尻のおばさん

” がんっつ！ ”

いきなりげんこつが飛んで来た。

いたい。

ものすごく痛い。

僕は、頭を押さえて振り返った。

拳を降ろした父親。その向こうで、お尻のおばさんが腰に手を当てている。

おばさんの足下には大きな紙袋が落ちていて、中から肉の包みや野菜なんか飛び出し地面にばらまかれていた。

カミサマ、何で子供って、何かをする時大人を怒らせずに出来ないの？。

と、思った。

二人とも凄く怖い顔で、それが僕のためにしているのが凄く嫌でー。

どうして子供なんか生まれちゃったんだろう。

僕はべそをかいた。

親父は黙ったまま僕のシャツの襟をつかむと、おばさんの前まで引きずっていった。

頭をぐいぐい押さえられ、何度も何度もごめんなさいをして、落ちた物を拾い集めた。

親父は食べ物の汚れを一つ一つ袖で拭き落とし袋に詰め戻すと、これでなんとかとおばさんに差し出した。

おばさんは受けとろうとしない。

親父は袋の底についた泥に気づくと、片足立ちをして膝でぬぐった。

いやあ、うちの坊主が失礼しましたとかなんとか。

おばさんは受け取るうとしない。

ただ、

「弁償しなさい」

と言った。

おやじはきつとごねるだろうなと思った。酒代以外にはものすくくケチだから。

でも親父は、ちよつとのあいだ肩を落としただけで直ぐに財布を取り出した。

大きなため息。さっきの僕みたいに。

おばさんはお金をひったくるように受け取ると、身体に似合わず小さな財布に入れて素早くしまいこんだ。

ついでに紙袋までひったくった。

親父と僕はあつけにとられた。

「奥さん、そのお　お金は渡したのだから、その食料はこちららにもらえませんかね」

まあおどろいた。といった顔のおばさん。

「あなた達、こんな地面に落ちた不潔な物を食べようとでも言うのっ？」

「じゃあ、あなははどうするんで？」

「もちろん、処分するぞます」

嘘だ。肉は包みに包まれてたし、お芋や人参だつて洗って皮を剥けば済む事じゃないか。

お金と一緒に、食料までふんだくろうとしてるんだ。僕は唇を噛んだ。

おやじは粘り強く説得した。あの喧嘩っ早い親父が、めずらしく微笑みさえ浮かべている。

「あー、それは、奥さん、私らの方でやりましょう」

親父は紙袋へ手を伸ばしたが、おばさんは手をはねのける様に背を向けると、肩をひとゆすりしてずかずかと歩いて行ってしまった。

「ちよつとあんた！、いくらなんでもそれは貰いすぎだろ

う」

さすがに親父も怒った。

いいぞ、そうこなくっちゃ。

ところが、親父は一步踏み出しただけでしやがみ込んでしまった。

「あれ？、父さんどうしたの？。あのおばさん行っちゃうよ！」

親父の怒りの矛先がおばさんに向けられたので、僕は何とか親父をけしかけようと必死だった。

「うう」

親父は苦しそうにうめいた。

お腹を押さえて、ぜえぜえと荒い息を吐いてる。

えへんと大きな咳払い。ちよつと粘つく様な音でー。

僕は、不安になった。

「どうかしたの？、父さん」

やがて、ふうと一息つくと、親父は立上がった。

「なんでもない。くそ、昨夜は飲み過ぎた」

「昨夜？」

「行くぞ」

「どこに？」

「家に帰るんだ！。決まってるだろっ」

またゲンコツが降ると思ひ、身体をすくめて目をぎゅっと閉じた。今度は降ってこなかった。

親父は肩を落として歩き出した。

僕は心の底からがっかりした。

「お金持ちにはへいこらしろって事だね」

「そうじゃ無い！」

拳骨が降ると思った。まったくもう、カミナリは一度に一回で十分だ。

でも、降って来たのは奇妙な言葉だった。

「あれはカナリアの妹だ」

「なあに、それ？　。　だいたい、あの子はお姉さんも妹も居ないって言ってたよ」

「お前、そんな事聞いてたのか！」

はつと首をすくめて目を閉じた。こんどこそ拳骨が　。　でも、降って来たのはため息だった。

「　とにかくあの親子には関わるんじゃない。判ったか！」

「返事は？」

「はい」

親父はそれつきり、何も言わなかった。

僕は足元の石ころを蹴った。憎しみを込めて。

お腹がグウと鳴った。

別に僕は、何か悪い事をしようとしたわけじゃないんだ。

みんなあの夢が悪いんだ。

あんな夢さえ見なければ、今頃はおいしいお肉をお腹いっぱい　。

口を尖らせて、親父の顔を見上げた。

苦い薬でも飲んだみたいな顔だった。

暑くなつたのか、帽子をとると、ぐいと額の汗をぬぐった。

僕は見た。

右の目上。紫色に。

葉っぱみたいな形のアザ。

女の人にチヨツカイでも出したのかもしれないー！。

皿の上のくし。まだ肉が三切れ残ってるー！。

ぴしゃりと乱暴に閉まった扉。まるで僕が悪いみたいー！。

「昨日」は確かにあった。

あれは夢ではなかったのだ。

くつづく

6：憲兵

次の日。

僕は、親子を探しに出かけた。もちろん、あの女の子に会うためだ。

女の子に会って何かを伝えたいとか、何かをするつもりだとかは考えていなかった。

暗い橋の上で出会った青白く光る小さな人影が、熱病の様にいつまでも頭から離れなかった。

とにかく女の子の姿を探し続けた。ただそうせずにはいられなかったのだ。

ナラク橋へ行くと、出口の支柱に寄りかかり、通り過ぎて行く人々の列を眺めた。

人の目をジロジロ見ると睨みつけられる事。目が合いそうになったら、キョロキョロとあたりを見回せば睨みつけられずに済む事。

それを知った事だけが、この日僕が手に入れたものだった。

僕は毎日、橋の袂に立った。あの親子が行ってしまった道から、そのうちまたナラク橋へ戻ってくると僕は思い込んでいた。

一週間後、どうやらそうじゃないらしいと気づいた。

親子が歩いて行った通りは、その先で二つに別れ、一つは駅、一つは港へと続いている。親子が汽車と船のどちらで旅行に出かけたのかは、もう知りようがない。

僕は、ナラク橋を渡り、親子がやって来た方角へと足を向けた。

綺麗でしみ一つなく、形が変わってて、いかにも高そうな服を来てる人達がたくさん住んでいる所を、僕は知っていた。

商工業地区の道はどこもそうだけど、細い道がくねくねと入り組

んであちこちに伸びている。飲み屋街はその向こうにある。

僕は通い慣れたくねくね道を通らずに、ナラク橋から続く街道を真っすぐに進んだ。

鉄板とパイプをめちやくちやに積み重ねて作った山のような大工場の脇を通りすぎた。

平日の日中だったから、大人達はみんな工場の中なのだろう。街道は荷汽車の長い列がガタゴトと通りすぎる他は、人通りも少なく閑散としてしている。荷汽車の鉄輪が巻き上げる砂埃で、つねに埃っぽかった。

大工場沿いの高い壁に沿って歩くと、ときおり大きな門があってそこに立つ憲兵がいつも僕を睨みつけてきた。

僕はまっすぐに前を向いて、さっさと通り過ぎた。僕は迷子じゃないし、どこかに行くつもりかちゃんと判ってて歩いてるんだと思わせたかった。

通り過ぎる門の中には、ひどく錆びついて、何年も開けた事が無いんじゃないかと思うような古い門もあった。その前にも憲兵が立ってるのが不思議だった。

なんか様子が変だ。身体が全然揺れてない。でもやっぱり、こちをジロジロと睨んでるー。

僕は怖かったから、やっぱりまっすぐ前を向き、そのまま通り過ぎた。

そういった古い門の前には、いつも落ち葉が降り積もっていた。それを3つ程通り過ぎた時、僕は気がついた。憲兵の足元にも落ち葉が積もっていたのだ。そしてお菓子の空き箱も。

僕は、思い切って憲兵の方へ顔を向けた。右の腕が無い。人形だった。

なんだ と思い、ほっとした。少なくとも、こういう閉め切られ

た古い門の前ではビクビクしなくても良いのだ。

僕は人形の傍へ行った。枯れ葉が一杯たまつてて、すり足で歩くと前方に葉っぱで津波が起きた。

落ち葉の山に潜った足を蹴り上げて人形に浴びせかけた。憲兵の顔はむっと怒った顔のまま固まっている。

どんなイタズラしても怒らない憲兵。こんな面白いおもちゃがあったなんて。僕は嬉しくなった。

人形の足元に腕が落ちていた。持ち上げると重くて湿っぽかった。腕の付け根にネジが付いていた。人形の肩をみると、小さな穴が空いていた。

僕は腕を拾い上げた。布みたいな手触りで、カビ臭い。手のひらの側を持ち、腕を持ち上げた。

ネジも穴もあるのなら、またくつつくかもしれない。

重心が上に行つてふらつき、なかなか入らない。

ネジが肩にコツンと当たると、砂がパラパラと目に降つて来た。顔をそむけながら、どうにかネジを穴にはめ込んだ。

そつと手を離れた。腕は落ちない。

良い事をしたんだ。そんな気分になった。

背後を荷汽車が通つていった。ゴツゴツと下から突き上げられるような振動。腕はぶらぶらと揺れて、どさりと落ちた。

「ちえっ」

僕は落ちた腕を蹴ると、腰に両手を当てて人形を見上げた。

「だらしが無いなあ。せつかく直してやったのに。たるんどるぞ、キサマあ」

僕はほつぺたを打とうとして飛び上がった。届かない。

「キサマっ、ハンコウするつもりかあっ」

僕は人形の腹をげんこつで叩いた。

その時の僕は、すごくニヤニヤしていたと思う。いつも親父に殴

られている仕返しのもりだったのだろう。

「判ったか！。判ったら返事をしろっ」

その時、人形の目が動いた。

「あれ？」

次の瞬間、ピーーツともポオーツともつかぬ大きな音が耳を貫いた。僕は飛び上がった。

そして、大きな犬が吠える様にガミガミと怒鳴る声。

「こらっ！。貴様そこで何をやってるんだ。無断で工場の敷地内に立ち入ってはいかんっ！」

僕は辺りを見回した。誰も居ない。

「今からそこへ行くからな、動くんじゃないぞ、貴様っ」

どうやら声は人形から出ているらしい。僕は急いで逃げ出した。

後ろから憲兵が追いかけてくるんじゃないかと不安だった。心臓が破裂しそうにドキドキしていたけど、必死で走った。

次の門が見えてきた。さっきの荷汽車がその中へ入っていくから――、「使われている門」だ。今度の憲兵は人形じゃない。

僕は立ち止まった。

捕まったらどうしよう。

後ろを振り返った。さっきの門には今頃憲兵が駆けつけてるだろう。そこに誰も居ないと知って、こちらへやってくるかもしれない。戻ったらきつと捕まる。でも、次の門に立っている憲兵は、僕の事をまだ聞いてなくて知らないかもしれない。

悩んでる時間はなかった。僕は歩き出した。

普通にするんだ。普通に、普通に。

僕はこれまで通り前を向いて歩いた。憲兵はやっぱり睨みつけてるけど、こちらにやっつては来なかった。

動かないで、お願いだから、そこにじっとしてて。

無事通り過ぎた。でも、通り過ぎた後もまだ、怖かった。背中に

も目が付いてればいいのにと物凄く思った。

精一杯耳を澄ませる。こちらへやってくる足音は聞こえてこない。ずっと工場脇を通っていた街道が、前方で左に折れていた。それは目的の場所へと向かう方角で、工場の憲兵達ともう遭わずに済むと言っ事だった。

歩く速度が自然に早くなり、いつの間にか駆け出していた。

駆けながら振り向いた。僕を追いかけてくるような人影は見当たらないー。

僕は立ち止まり、膝に手を手を付いて息を喘がせた。

大工場は、街道沿いに連なる平屋の町工場の影に隠れ、お椀を伏せたような丸い屋根が見えるだけだった。その横に白い塔が見える。

「あんな所に、塔が建つてたんだ」
初めて見る建物だった。きっと、僕の家からは大工場に隠れて見えなかったのだろう。

横にでこぼこしていて不恰好だけど、かなり高そうな塔だった。

トンカントンカン、ガラガラガラガラ、ジューツジューツ。急に、色々な音が辺りの町工場から聞こえてきた。

その騒がしい音が、妙に気持ちを落ち着かせた。僕は、また歩き出した。

しばらくすると、灰色の大きな建物が並ぶ場所を通った。全て倉庫なのだろう。

町工場から離れた為か、やけに静かだった。さらに進む。

やがて、住宅街に差し掛かった。

でも、僕らが住んでる様な住宅街じゃない。

細かなレンガで模様が描かれた綺麗な路面。色とりどりの花が植

えられた花壇と高い樹が並ぶ沿道。廃材や錆びたパイプで無く、木の板で出来たなめらかな壁。その壁の奥に、こじんまりとした家が建っていてー。

そういうのが道沿いにずっと続いていた。

富裕街。来るのは始めてだった。

そこは、親父の様な手と体を使う仕事で無く、頭と言葉を使って仕事をする人達が住む場所だった。

「本当だったんだ」

小さな頃に、母さんから話に聞いていた通りの場所だった。

どの家にも、窓がなかったのだ。

くつづく

6：憲兵（後書き）

【あとがき】

HPで大規模な更新作業をしていたため、しばらくこちらへの連載を中断していましたが、久々に再開させて頂きます。

一応最後まで書くつもりですが、プロットを書く度にボリュームが増えていくので、また途中で小休止してしまったらごめんなさいです。（当初は短編のはずだったんだけど）

ちなみに、挿絵の方はまた、話が一区切り付いてから描かせて頂きます。

結構頑張ったつもりだったんですが、一日に一点づつ描くのが精一杯でした。もっと手際よくやらないと、とても全話分描けないぞ、俺。orz）しっかりとるのだ！

というわけで、あれこれ悩みつつも、最後まで頑張ります！。

（、・・・？）ノ

7：すばらしいまち

もつと小さい頃。母さんに、ちぎり絵で街を描いてもらったことがある。

あれは、何日も降り続く雨の為に、ずっと家に閉じ込められていた日の事だった。

母さんは、家中から色の付いた紙を集めてきた。白い紙をちぎり、真つ青の画用紙に沢山貼りつけていった。

僕はそれを指差して「くも」だと言ったらしい。母さんは首を振り、「これは『おうち』なのよ」と、辛抱強く教えたそうだ。

そのちぎり絵は「すばらしいまち」と名付けられ、窓の側に飾られた。

「すばらしい」という言葉は、一目見ただけで、ああ凄いなと心から気に入ってしまう事なのだと教えられた。

でも僕は、「すばらしいまち」に描かれた赤い屋根の家や、白い船の浮かんだ青い川よりも、

家の窓から見える、サビと砂埃で赤茶色にけむって見える大工場や、水の無い川である真つ黒なナラクの方が好きだった。

今、僕の目の前にある街こそが、母さんの描いた「すばらしいまち」なのだった。

白い壁に赤い屋根、青い空を背景に、まるで絵のように。ずうつと何軒も続いてる。

確かに美しい眺めだった。道にはごみ一つ落ちてない。

でも僕はその街が好きになれなかった。

道を通る人が誰も居ないし、立ち並ぶどの家にも窓が一枚も無い事が、どうしようもなく僕を不安にさせた。まるで、目と鼻の無い人の顔を見せられたようだった。

僕は母さんに聞いた事がある。

「どうして、『すばらしいまち』のお家には窓がないの？」
母さんは、

「その方が『すばらしい』からよ」と、言った。

僕はその時、母さんの言ってる事の意味が全然判らなかつた。それは、本物の「すばらしいまち」を歩いてる時も同じだった。

街道はゆるくカーブしているので、道の先に何があるのかは見えなかつた。

どこまで歩いてても周りの風景が変わらないので、まるでちぎり絵の「すばらしいまち」に閉じ込められて迷子になったみたいだった。

ナラク橋の上で出会った親子ー。きっと、ここから来たに違いない。僕はそう思っていた。

女の子も両親も高そうな服を着ていたし、車輪のついた大きな力バンを転がしながら旅行に出かけていったのだ。そんな事をするのは金持ちだけで、そして金持ちが住んでいるのはこの辺りのはずだった。

でも、道に誰も人が居ないのでは、あの親子の事を聞いて回る事が出来ない。

あの親子が誰なのか、そしてあの女の子は、あの女の子は。

僕は、あの女の子の何を知りたいのだろう。

夜。ナラク橋から飛び降りた女の子。その女の子と、同じ服と同じ顔をしていた女の子。二人は別人で、姉妹でも無くてー。

「いったい僕は、あの女の子」から何を知りたいのだろう。

とつぜん、それまでとは違うものが目に入った。道端に人がいたのだ。

どこかのおばさんだった。小さな折りたたみ式の椅子に座り、エプロンを付けたまま家の門の前でタバコを吸っている。

僕をじっと見ていた。でも、睨んでるような目じゃなかった。僕もおばさんを見つめた。

「こんにちは、坊や」

「こんにちは」

僕は立ち止まり、ちよつとつむきながら、手を後ろに組んでもじもじした。こうすれば、たいていの大人は「どうしたの？」って聞いてくるはずだった。

でも、そのおばさんは、タバコをくわえながらじつと僕を見ていただけだった。

僕は、そわそわと辺りを見回した。他には誰も居ない。何かを聞きたいなら、この人に聞くしかない。

「あの。あのね」

「うん？」

おばさんは頬づえを付いた。

僕は、ナラク橋（があると思う方向）を振り返った。

「あのお、ええと。僕、誰かを探してるんです」

「はん？。誰を」

「お、おんなの子です。僕よりちよつと大きいくて」

「女の子だけじゃわかんないよ。名前はなんて言うの？」

「わかんないんです。あの、服が、白い服の、スカートをはいていて、長い髪で。あと、目が青くて、唇が赤くて」

「そんな女の子はこの辺りにたくさんいるよ。その子がいったいどうしたの？。何をしたいの？」

それは絶対に答えられない質問だった。なにしろ、僕にも判らないのだから。

「落しものが、あるんです。だから」

「ああ！、そういう事かい。その子は、この辺りに住んでるの？」

「たぶん」

「はつきりしない子だねえ」

”落し物”。とっさに口に出してしまった言葉だった。なんでそんな事を言ってしまったのかー！。

「おとうさん、あと、おとうさんとおかあさんが一緒に居ました」

「その女の子と一緒にいたの？」

「はい！。えと、グレーの長い服を着ていました。端っこにくちやくちやくと線が付いてて」

「おかあさんが？」

僕は首を振った。

「ううん！、おとうさんが。お母さんは、ええと、白い服のスカートで、赤い服を着ててー」

「はん？。白いのか赤いのかどっちなの！」

「えと だから、白い下のスカートと、上に赤い服をちっちゃく着てました」

おばさんは、ぼりぼりと頭をかいた。

「ああ うーん、そう言われてもねえ。そういう奥さんはあちこちにいるよ」

僕は、橋の上で見た光景を一生懸命思い浮かべた。女の子の白いスカート、太陽できらきらとオレンジに光っててー、背の高いお父さんと、背中に穴の開いたお母さんがー。

「あ！。背中に穴が開いてました」

「ん？、お母さんが？」

「はい。丸く穴があって、くるの、黒い服が見えてて」

そこで、おばさんの顔が変わった。くわえたタバコをさっと手に

持つと、口を大きく開けて（金歯が沢山見える）、

「ああっ！。あの家の！。ああ、ああ」

「知ってるんですか」

おばさんは、地面に置いた空き缶に素早くタバコの灰を落とすと、また口にくわえた。

「あー、いつてるよいつてる」

知ってるよ知ってる と言ったのだろうか。おばさんは思いっきりタバコを吸い上げると、上を向き、煙をわーっと吐き出した。

僕の顔にも煙が来た。けほん、けほん。

おばさんは、空き缶の内側でタバコをもみ消した。僕はほっとした。

「あの、知ってるんですか？」

おばさんはひよいと顔を上げると、目を閉じて、アゴで釘を打つように何度もうなずいた。

その時僕は、ようやく女の子の手がかりを掴む事が出来たのだ。

でも僕は、素直に喜ぶ事が出来なかった。

家を見つけて、あの女の子に会ったとしても、それから何をすればいいのだろうー。

「あの人達なら逃げたよ」

「ー」「えっ！」

「逃げた」

「にげ た？」

おばさんは、説明に困った大人がよくするように、目線をそらして頭を掻いた。

「あー、だから。その、引越したんだよ」

「ひっこし たんですか？」

「ああそだよ。つい、こないだね」

「あの、その人達、戻ってくるんですか？」

「どおうだかねえ」

おばさんは、傍らにおいたバッグからチョコレート箱を出した。
「手を出しな」

「あ！、はい」

おばさんは僕の手のひらに、銀紙に包まれたチョコレート三個くれた。

「ありがとう」

「ポツケへ入れずにすぐ食べるんだよ。溶けるからね」

「はい」

歩き通しでお腹がすいていた事を、その時になって気が付いた。僕は夢中でチョコレートを食べた。アーモンド入りのチョコは滅多に食べられない。凄く美味しかった。

「落し物ってなんなの。わたしが預かつといてやるうか？」

僕はどきりとした。何度も首を振る。

「ううん。いいです」

「どうして？」

食べ終わったチョコレート銀紙をぎゅっと握りしめた。どうしよう、なんて言えば。

「あの、あのあ」

「うん？」

「あのね、これ 秘密なんだ」

おばさんは吹き出した。

「はははっ。ひみちゅかあ。まいったね、子供にはかなわないよ」

おばさんは立ち上がると、エプロンへ落ちた灰を払い落とした。

「さあて、家に戻らないと。それじゃあね、ぼうや」

「はい。さようなら。チョコレートありがとう」

おばさんは椅子をたたんで抱えると、鉄格子の大きな門に付いた小さなドアを開けて中へ入った。僕は急に大事な事を思いついた。

「あのっ、すみません」

「なんだい？」

「その女の子、旅行に行っちゃった人達、なんて言う名前なんですか？」

おばさんは、何かを言いかけて口を開いた。でも、ふふつとため息混じりに笑い、言った。

「そいつはね、ぼつや。」秘密”だよ”

はははと笑いながらドアを閉めて、おばさんは家へ戻っていった。

僕はしばらく立ちつくした。僕が「秘密」なんて言ったから、お返しされたんだ。

失敗しちゃった。そんな気持で頭が一杯だった。

僕はまた、とぼとぼと道を歩き始めた。

茶色の木の壁と、オレンジの路面。青い空に白い家と赤い屋根。それがいつまでも続いていた。

さっきのおばさん以外には、誰にも会わなかった。

やがて、赤い屋根の波の上に、青みがかった灰色の建物がいくつも見えてきた。

さらに歩くと、ぎらぎらと銀色に光る大きな門があった。

街道は、そこで終わっていた。

くつづく

8：ほうきのおじさん

その巨大な門は、街道の両側に立てられたピカピカの太い柱と、銀色の大きな扉で出来ていた。

手で押してみたけどビクともしない。表面は太陽の熱で熱い。すぐ手を離れた。

引っ張ったり、横に動かしたり出来るような取っ手は見当たらない。どっちにしろ、小さな子供の力で開くようには見えなかった。

（これ以上は前に行けないのかな）

それにしても、向こうに見える高い建物はなんだろう？。そう思い悩んでいると、しゃしっ、しゃしっという音が聞こえていた。だんだん大きくなってくる。

左手の方から聞こえる。どうやら音の主は、壁沿いにこちらへやって来るようだ。

それは、ほうきで地面を掃くおじさんだった。

門の向こうにある建物と同じような、青みがかった灰色のツナギ服と、同じ色の帽子を被っている。

背中に大きな袋を背負っていて、長い取っ手が伸びていて蓋付きの箱型をしたちりとりを腰にぶら下げていた。

ほうきのおじさんは、黙々と掃除をしながら僕の方までやって来た。

しゃしっ、しゃしっ。ほうきの音が辺りに単調に響く。

時折、ちりとりを降ろして中にごみを掃き込んだ。カタン、ざざっ、ざざっ。

僕は、邪魔にならないよう後ろに下がった。

おじさんは僕と門の間を通りすぎると、真っ直ぐ行かずに、こちらへカーブするコースを取った。

しゃしっ、しゃしっ。

おじさんは、僕の周りをほうきで黙々と掃き始めた。
しゃしっ、しゃしっ。

僕はなんだか怖くなってきた。

掃き進むほうきの通る道が、僕の周りをぐるぐると取り囲むように進んでいて、その輪がだんだん小さくなってきていたのだ。

僕はおじさんから目を離せず、何度も首を巡らせた。

おじさんは周回を繰り返しつつどんどん近づいて来て、とうとう僕のすぐ目の前に来た。

しゃしっ！、しゃしっ！。しゃじっ！、しゃじっ！。

ほうきの先っぽが僕の向こうずねを引っ掻いた。

「いたい！」

僕は泣き出しそうになった。

その時、ガシャリと音がして、門の一部が横へ滑り始めた。

しゃしっ、しゃしっ が止まった。

門の開いた空間に、もう一人のおじさんが立っていた。その向こうには、建物が沢山建っているー！。

また、ガシャンつと音。びっくりして目をつぶってしまった。

目を開くと、門はもう閉じられていた。

二人目のおじさんは、気を付けの姿勢で立っていた。ほうきのおじさんとまったく同じ格好で、袋もチリトリも身に付けてるけど、ほうきだけ持っていなかった。

ほうきのおじさんは、二人目のおじさんの前まで歩くと、同じように気を付けをした。ほうきを前に立てたまま差し出すと、二人目のおじさんがほうきに手を伸ばした。

そして二人とも、握ったままのほうきを中心にくると回転した。素早い足の動きで、あっという間に二人の位置が入れ替わった。二人同時に振り返ると、互いに背を向けた。ガシャリと門が開

き、一人目のおじさんは中へ入っていった。

くぐり抜けた途端に、ガシャンと門が閉まった。

二人目のおじさんは、地面を見た。何かを探すように目が動いている。

やがて、僕の足元に目を止めた。すたすたと僕の前に歩いてきた。

おじさんはほうきを構えると、僕をじっとみた。ちょっと、ぼおつとしてるような目。触るとざらざらしそうな髭が短く伸びている。

「おまえ、『会社』に何かようなのか？」

急にしゃべられたので、僕はびっくりした。

「えっ。あの 違います」

「じゃあ、”そこ”をどいてくれんか、掃除が出来ない」

僕は、足元を見た。

その周りを、ほうきで掃いて出来た線が、綺麗に円を描いている。

あっ と気がついた。その円を踏まないように、大きくまたいで、そこをどいた。

おじさんは、僕が立っていた場所を掃き始めた。

門の周りはほうきで掃き清められ、すっかり綺麗になっていた。僕の立っていた場所だけを除いて。

（僕は、掃除の邪魔をしてたんだ）

知らない間に人に迷惑を掛けてたと判り、僕はしょんぼりした。

また、しゃしつ、しゃしつ が始まった。

二人目のほうきのおじさんは、手を休めずに言った。

「なあおまえ。ここに立ってたら邪魔だよって、あいつに言われなかったか？」

「さっきのおじさんに？。ううん、何も」

おじさんはため息をついた。

「あいつは無口だからなあ」「カタン、ざさっ、ざさっ。」

僕は、何も言えずに立っていた。おじさんは、手を止めると、僕を見た。

「そこでそうしていて、楽しいか？」

「え」

僕は、小さく首を振った。

「そうか。じゃあ、楽しいと思う事をしろ」

そう言つと、おじさんはまた掃除を始めた。

僕は、考えた。

(今日僕がした事って、「楽しい事」なのかな？)
よく、判らなかつた。

しゃしっ、しゃしっ。

「おじさんは、楽しいと思う事をしているの？」

おじさんは振り返らずに答えた。

「どうだろうなあ。楽しいと思えば楽しい。楽しくないと思えば楽しくない。その日によって違うんだ」

「同じことをしても？」

「そうだ。坊主も大きくなれば判るさ」

大人が「大きくなれば判るさ」と言うときは、「これ以上何かを聞いて俺を困らせるな」と言う意味だった。

だから僕は「うん、わかつた」とだけ答えて、それ以上何も聞かなかつた。

「さようなら」

ほうきのおじさんは、黙って地面を掃き続けていた。

ゴミなんて、ほとんど落ちていないのに。

〜つじく〜

9：子ども達

僕は、街道を逆に辿った。

結局、女の子の正体もその行方も判らずじまいで終わってしまいそうだった。

「すばらしいまち」と、ごみ溜のようなナラクの町は一本の街道で結ばれてはいたけれど、橋から飛び降りた白い小さな謎につながる手掛かりは、子供の背丈ではどうにも超えられない壁に閉ざされ、途切れてしまっていた。

道には、二つの顔がある。往く時と。帰る時と。

ナラクの通りであれば、それはまったく違う顔を見せるものだ。

片や、空を丸く切り取る鉄の稜線がそこだけにしかない景色を作る大工場。片や、のりで貼りつけた紙を引き剥がして残ったブツブツみたいなガラクタの家のガラクタの屋根。僕らは同じ町に住みながら、まったく別々の景色の中に住んでいた。

この町はまったく違う。一枚の何も書かれていない紙の様に、裏も表も同じで見分けがつかなかった。クレオンでめっちゃめっちゃに書きなぐりたい衝動。やっぱりどの家にも窓があいていない。欲しいものを買ってもらえない子どもの不機嫌のままに心をいらだちつものらせた。

無性に何かを蹴りたかった。でも、地面には空き缶どころか小石一つ落ちていない。ほうきのおじさんたちが毎日掃除をしているからだろうか。

何も載ってない綺麗なお皿を出され、「さあ、食べなさい」と言われてるような気持ち。何もかもがきちんとしてて、何もかもがつまらない。「すばらしいまち」。これが？。

道端に落ちてる「何か」は、大人にとっては片付けるべきゴミでも、僕らに子供にとつては、一つ一つが新しい発見だった。

葉っぱの詰まった古い缶は、逆さに振ると何が出てくるか判らない宝箱といえた。黒くて細長い甲虫と出るか、転がるダンゴムシと出るか、あるいは小さな世界を腐葉土で埋め尽くそうと無邪気に頑張るミミズの時もある。

「ごちゃごちゃとした仕組みの残る機械部品は、地面に置き方一つで汽車にも船にもなった。赤茶色のサビは、くだらない鉄くずを世界で一つしか存在しないスーパーマシンへと変えるテクスチャーだった。

止めネジが朽ちていれば手でこじ開けられる。中に歯車がびつしりと詰まっていたりすれば、それは何か「凄い過去」を持っていた証拠で、みすばらしい街しか知らない卑屈な少年にわくわくする空想の切っ掛けを与えてくれた。

「すばらしいまち」には、これらの発見がまったく無かった。

今にしてみれば。

その時の僕は、「すばらしいまち」を訪れていたつもりでいて、その実「すばらしいまち」の外側に居たのだった。

母さんの言っていた「すばらしい」とは、あるいは壁の向こうと家の中にある何かを指して言ったのかもしれない。何にせよ、その時の僕がいくら背伸びをしたところで知り得ない事だった。

目に見える物、手で触れるもの、歩いていける場所が、子供にとって世界のすべてだった。そうで無いもの、そうさせてくれ無いものに興味はなかったし、「すばらしい」と思えるはずも無かった。

結局の所、母さんの作ったちぎり絵と現実の街には、その時の僕にとつてまったく違いが無かったのだ。眺めて終り。それ以上のこ

とは何も無し。

この冒険は、ただひたすら退屈なものとなっていた。

僕は踏み足を強く、タンツタンツと叩きつける様に歩いた。薄いゴム底はレンガの痛さをまったく受け止めなかった。かかところが痛くなったので、おとなしくまた、とぼとぼと歩いた。

あいかわらず道に人がまったく居ない。それに、道端で遊ぶ子供たちも居ない。ほうきのおじさん、ゴミと一緒に人間までちりとりに掃き入れているんじゃないかしら？。

さつきチヨコレートをくれたおばさんと出会わなければ、完全に無人の街だと思ってしまふ所だった。

道に、おかしな所があるのに気付いた。家と家の間を抜けて行く路地と言うものが無いのだ。街道側から見ても家の向こうにも、何かの建物が並んでいるのが見えるから、そちらへ行くための道が無いのは奇妙だった。

そういえば、何かを売るお店屋さんがまったく見当たらない。一本の道に、ただ家だけが延々と建ち並んでいる有様だった。どの家にも必ず立派な鉄の門があつてー！。

「あれ？、この門には家が建つてないぞ」

それは、黒いペンキを幾度も重ね塗りして表面がもこもこした鉄の板で作られた門だった。その向こう側に、家の屋根が見えていない。

門の高さに隠れてしまうほど屋根が低く平たい家なのだろうか？
。あるいはうんと遠くに立っているとか。

門は僕の背丈の三倍もあつて、向う側に何かがあるかまったく判らない。中がどうなっているか気になったが、よじ登つてまで見て見ようとは思わなかった。誰かに見とがめられ憲兵に通報されて捕まりでもしたら、げんこつくらいでは済まなくなる。

路面を覆うレンガで作られた帯模様は、街道から横へ枝分かれし、門の中へ続いていく。ひよっとすると、門の向こうはどこかへ続く道があるのかもしれない。

そう注意して歩いてみると、そういった門が、一定の距離間隔で置いてあるのだった。

ふいに前方で、その一つが開いた。二枚の扉が両開き式に引き込まれていく。蝶番がぎちぎちときしむ音。やがて中から、薄い青色の制服に身を包んだ子供達がぞろぞろと現れた。

向こう側へ向かうのと、こちらへ向かうのとに別れると、きちんと整列して進んで行く。生きてるとも死んでるともしれなかったこの街の見せる、初めての大きな人の営みだった。

僕と同じくらいの子供も居れば、もっと大きな子供もいた。おそらく、初等学校の子供達なのだろう。

列の中から、ちらつちらつと視線が刺さった。この街で僕だけが違う身なりなのだから、一目でよそ者と判ったはずだ。

僕はいじめられはしないか不安になった。思わず辺りを見渡す。助けてくれそうな大人はどこにも居ない。子どもの行列は、だんだんこちらに近づいてくる。

(さっきのおばさんはどこの家に住んでるのだろう)

探そうにも、どの家も同じ外見だからまるで区別がつかなかった。まだ字をきちんと読めない僕は、表札を読んで名前を覚える事など思いもしなかった。

でも、幸いな事に、子供達は僕に興味が無い様だった。

誰も声を掛けてこないし、ちよっかいを出す奴もいない。それでも、彼らとすれ違う時にはなるべく離れ、うつむいて目を合わせないようにした。

列の前後でぼつぼつとおしゃべりをしたり、何かの本を見せ合ったりしながら、彼らは彼らの街を彼らの家へと歩いていった。もう視線は感じなかった。

(無視されてるかな)

いじめられる気配は無いのでほっとした。それなのに僕は、しょんぼりした気分になっていた。街の住民の中に囲まれてさえ、相変わらず僕は「すばらしいまち」の外側にいたのだ。

何故こんな所に来ちゃったんだろう。ふと、そう思った。

子供達はそれぞれの家にたどり着き、さよならやバイバイを列に言い残し、一人、また一人と門の中へ消えていった。

気がつくと、倉庫街が近くに見えていた。すでに街のはずれまで来ていた。

子供の列は、10メートルほど先に行く女の子を一人残すだけになつていた。

短いツバがぐるりと囲む帽子の下から、長い髪が右に左に揺れていた。

その子は、橋の上の女の子と同じ背丈でー。

自分の家に着いたのか、門に作り付けられた小さな扉を開け、一足またいだ。横髪に隠れ、顔がよく見えない。

奇妙な感覚が頭をもたげていた。同じ家に住み同じ服を着る子供達。ひよつとして、顔もみんな同じじゃないのかー？。

僕はその子を見つめすぎてしまった。視線に気づいた女の子が、さつとこつちを振り向いた。

まったく違う顔だった。

僕は慌てて目をそらした。凄く恥ずかしかった。

きいと音がして、扉が閉まった。ガチリと何かの金属音。
街は静かになった。

僕は駆け出した。一刻も早くこの街を抜け出したかった。

くっくくく

10：家に帰る

立ち並ぶ倉庫を駆け抜け、町工場街へたどり着くと、僕は無性にほっとした。自分の居場所に戻ったという気がした。

町工場の屋根が連なるギザギザの線を踏みつける様に大工場がそびえていた。

もう午後も遅い。傾いた陽光がスモッグに煙る工業地帯をくたびれたオレンジに染めていた。

街道は、仕事を終えてぶらぶらと家路につく工員達がちらほら見られた。

町工場街を抜けると、街道は右へ折れ、また大工場を周回する順路となる。と、そこで僕は思い出したくない事を思い出した。

また、あの憲兵達の前を通らなければいけないのだ。

立ち止まって、5歳の子供なりに状況を分析した。

「ええと、憲兵の人形にイタズラをするのって、どれくらい「悪いこと」なんだろう？」

「イタズラと言っても、外れて落ちていた腕を拾ってまったくつけようとしただけだ。本来あるべき姿に直そうとしたのだ。これはむしろ誉められてもいいくらいではないか。」

しかしその後、人形を蹴ったり馬鹿にしたりしたのはまずかった。

「いやまでよ、人形を蹴ったり馬鹿にしたりって、そんなに悪いことかしら。」

「今度から気を付けるように」そう言われて終わりかも知れない。

でも、それで終わらなかつたらどうしよう。

僕は、親父が呼び出されて、みんなの見てる前で叱られたりぶたれたりするのが嫌だった。近所の子にそんな所を見られたら、この先ずっと馬鹿にされるだろう。

「どうしよう。どうしよう。」

僕は、曲がり角に置かれているベコベコにへこんだドラム缶の後ろに隠れると、そっと顔を出した。

そこからは、大工場の一つ目の門が見える。さつきと通った時と変化は無く、門番の憲兵が一人で立っているだけだ。誰かを探してうろろろする憲兵等は見当たらない。

さつきと違うのは、沢山の人が大工場から出て来る事だった。定時で仕事を終えた工員達なのだろう。

あの人達の中に入って歩けば、憲兵に見つからずに通れるかもしれない。

それは賭けだったが、他にいいアイデアも無い。とにかく、この道を通らない事には家に帰れないのだ。

僕は、門番に見つからないよう、壁へくっつくように歩き、門のそばまで行った。

がやがやとだべりながら門から出てくる若者の一団があった。僕はそっとその中に紛れた。

大工場との間に人がいる位置関係を保ち、ひたすら道路側を歩いた。大人は歩くのが早いので、遅れないように歩くのが難しかった。

門の前を通るときは、大人の影に隠れるよう身を縮めて歩き、憲

兵の視線から逃れた。

「使われてない門」もいくつか通り過ぎた。その中に、枯葉の山が踏みちらされている場所があった。

それが僕のせいなのか、悪戯小僧を捕まえに駆けつけた憲兵のせいなのかは判らなかった。

あの、腕の落ちた憲兵人形が、工員達の身体を素通りして僕を見つめてる様な気がした。走りだしたいのを必死でこらえた。

来る時よりも、何倍も長い距離を歩いているような気がした。道を間違えてるのでは という不安で何度も振り返った。

ついに、通い慣れた商工業地区へと通じる曲がり角が見えた。思わず走り出した。追いかけてくる憲兵がいないか振り返る余裕も無かった。

ナラク橋にたどり着くまで、ひたすら走り続けた。

家に着いたのは、すっかり日が落ちてからだった。

母さんにたつぷりと叱られたけど、「何処へ行つてたの」と聞かれなかったのでほっとした。

風呂に入り、自分のベッドに座り込んだ。物凄く疲れていたの、そのまま横になりたかったけど、お腹の虫がそれを許しそうになかった。

夕食に呼ばれ、居間のテーブルに駆け込んだ。

親父が食卓に居た。びっくりした。

「こんな」早い時間」に家に居るのは滅多に無い事だった。

〜続く〜

11：闇に怯えた夜

「おかえりなさい」
僕はつぶやいて、席についた。

今夜の献立は、ちっぽけな魚のフライに、野菜くずのタレをかけたもの。ごはん味噌汁。菜っ葉の漬物が”おかず”ではなく添え物だったから、「今夜はご馳走」と言う事になる。

とにかく腹ペコだったので、無我夢中でご飯をかきこんだ。

一番最後にとって置いた小魚のフライに箸を伸ばしたとき、親父がぽつりと言った。

「お前、大工場の前をうろろろしていなかったか？」

僕は内心飛び上がった。どうしてバレたんだろう！。

「僕、しらないよ」

今思うと、何故そんな事が出来たか判らない。僕は何事も無かった様に平然とフライを頬張ったのだ。

無関心を装ってご飯をかきこんだ。そのお椀に飯は一粒も残っていなかったけど、箸を止めなかった。

かちやかちや、かちやかちや。

しばし、間。

おやじは、「そうか」と言って、それっきり何も言わなかった。

「ごちそうさまをして、歯磨。僕はすぐにベッドに潜り込んだ。

猛烈に眠いはずなのに、一向に寝付けない。親父の言ったことが気になって仕方が無かった。

それが何故かは判らないけど、僕が大工場の周りをうろついている

た事を親父は知っていたのだ。

いや、まてよ。父さんは、それが僕だと決めつけてはいなかったー。

つまり、うるついでたのが”誰か”までは知らなかったんじゃないだろうか？。だいたい、大工場の前で誰かに名前を聞かれたわけではないし、知り合いに姿を見られた訳でもない。

僕は、憲兵人形の目にじろりと睨まれた事を思い出した。あれは立ってるだけの作り物でしか無かったけど、何かの仕組みによって人形の目を使って誰かが僕を”見ていた”のではないか？。

僕は運良く捕まらなかったで、ただ、小さな子供が大工場の前をうろろろしてるといいう知らせだけが、親父や他の工員の耳に入ったのだらう。

そう考えると納得がいくし、気も少し楽になった。

僕は、今日の冒険の意味を考えた。

謎の親子を知る人は見つけたけれど、親子の名前は聞きそこねたし、何処に住んでいたかも判らない。あの親子は引越してしまい、たぶんもう、「すばらしいまち」には帰ってこない。

「お金持ちだから、きつと遠くへ行ってしまったんだ」
僕は何故だかそう思い込み、あの女の子に会うことは、幼い子供の力ではどうにもならない事なのだと考え始めていた。

これ以上「すばらしいまち」へ行っても、たぶん何も判らないだらう。あのタバコのおばさんも、どの家に住んでいるかも判らない。

どっちにしろ、これ以上危ない橋を渡る訳には行かなかった。

(「ああいった連中にはかわるんじゃない」)

僕はその警告に対して「はい」と返事をしてしまった。それなの

に、親父が言う所の”ああいった連中”に会うために『すばらしいまち』へ行った事がバレたら、げんこつくらいでは済まないかも知れない。夕飯抜きくらいで済めばいい方だ。

もしも鍵を掛けた納屋に一晩中押し込められたりでもしたらー。大分前に、三日連続でおねしょをした時そうだった。その時の暗闇とカビ臭い匂いを思い出しぶるぶるつと震えた。

冗談じゃない。僕はぎゅつと目をつぶった。

別に何も困った事にはなっていない。少なくとも今のところは。だから何も気にすることはないんだ。ひたすら自分にそう言い聞かせた。

とつとと寝てしまおう！。

寝ると決めると、やけに町の様子が音に聞こえてくる。ごうと風が吹き、窓枠がカタリと揺れた。居間に掛けられた古くて大きな振り子時計がこつこつと動く音がまぶたの闇に忍び込む。こそこそと物音。投げ売りされた野菜を買ってきて、腐って悪くなった所を母さんがむしる音ー。

眠れない。布団を深くかぶる。闇の中に、白い人影が鮮明にうごめいた。僕はそれを無視した。

あの女の子の為に何かをしなくちゃという、闇雲な気持ちはもう無くなっていた。

出来ることはやってみただし、これ以上僕に出来る何かがあるとは思えなかった。

そもそも動機がなかったのだ。僕がしなくちゃいけない事はそもそも何も無かったのだ。

そうなんだ。あれは僕に何の関係も無いのだ。確かにナラクへ人

が飛び降りたけど、あの女の子は僕が居ても居なくても飛び降りたに違いない。

僕には関係ない。

ナラク橋から飛び降りた女の子も、その子と同じ顔をした謎の女の子も、全て忘れてしまいたかった。

眠れない。寝返りを打って枕に顔を押し付ける。白い人影は消えない。

「『すばらしいまち』へはもう行かないからね」

僕は闇の中の幻につぶやいた。膝を抱えて丸くなる。

(「見たかったなあ、お日様」
耳をふさいだ。

(「見たかったなあ、見たかったなあ、見たかったなあ、みたかったー」)
「やめて!。君が勝手に飛び込んだんじゃないか。僕には関係ない!」

深い海の底へ沈んでしまいたかった。地面に穴を掘って埋めてもらいたかった。何も見えない、何も聞こえない、深くて真っ暗で何も無いところに落ちてしまいたかった。

ナラク。

僕は泣いていた。何故泣くのか訳も分からず泣いていた。

いくら眼を閉じても、いくら布団に潜っても、何も無い真っ暗闇へ逃げ込む事は出来なかった。白くて小さい、その寂しそうな人影は、どこまでもつきまとい離れなかった。

ナラク。

真っ暗で何も見えないところへ落ちて行くなって、どういふ事なん

だろう。

何も聞こえなくて、何も感じないんだろうか。

そういうのって、なんだろう？。

そういうのって、

そういうのって。

今思えば――。

その夜。僕は「始まり」と「終わり」という名の「光と影」に、生まれて始めて気が付いていたのだろう。

それは、五歳の子供にはただひたすら漠然としたもので、形がはつきりと見えず捉え所が無いくせに、いつでも確実に「そこに居る」何か――。

幼心にも何故か、それだけは判るのだった。

それは心の耳に、いつまでも残り続ける小さな足音だった。

その足音から逃れるには生きることが辞めてしまっしかなかった。

そう気づくのは、もつとずっと大人になってからの事だった。

幼い僕は、闇がただ闇であるという事だけに怯え、泣き、眠った。そして朝が訪れる度に忘れていった。

結局、あの親子の姿を見かける事は二度と無かった。

くっくくく

11：闇に怯えた夜（後書き）

*** **

ここまでが第一部となります。第二部からはちょっと成長した「僕」が登場します。お楽しみに。

第二部 12：ガラクタ山のちんくり

とっておきの話をしてあげようか。”ちんくり”はそう言うて、
にっと笑った。

今にして思えば、その話を聞かなければ良かったと思う。

そうすれば、僕はちんくりと喧嘩もしなくて済んだし、もっと
いい形”で、お別れが出来たかもしれないのだ。

すくなくとも、仲の良い友達のままです。

夕日に照らされ桃色に光る大工場はクジラの腹だった。クジラを
取り巻く白い雲は時間の止まった水のアブクだ。ちんくりと僕は、
町工場とバラック作りの住宅で埋め尽くされた逆さまの大海原を、
秘密基地に寝そべりながら二人つきりで眺めていた。

このガラクタ山（正しい呼び方はイ-41号廃材物集積所）はこ
の辺りでは一番高い。僕達の、というより、ちんくりが見つけたこ
の秘密基地はガラクタ山のかなり高い位置にある。秘密基地と言っ
てもそれは、ガラクタ山から突き出したパイプの中にブリキ板を敷
いただけの狭い洞穴でしかなかった。

でも、とにかく眺めはすごかった。その日の天気や空の色、雲の
あたり無かったりとその形次第で、その風景はサビと誇りにまみ
れたナラクの町を、海原にも宇宙にも変えてしまった。

ガラクタ山イ-41号には至る所に子供達の秘密基地があるけれ
ど、たぶんこの秘密基地が一番高いと思う。

外へ這いでて振り返れば、頂上までの高さは10メートルも無さ
そうだ。その高さは、子供達が遊ぶのを許される”限界高度”をか

なり過ぎていた。

『ガラクタ山』は文字通りガラクタが積み上がって出来た山だけ
ど、上に行けば上に行くほど危ない場所になる。

元々ガラクタ山には人が立ち入ってはいけないのだけれど、比較
的しつかりしている山の中腹までなら大人達も見て見ぬふりをして
くれていた。その高さまでなら、上に積み上げられたガラクタ自体
の重みでどっしりと固着していて崩れる心配があまりなかったのだ。
しかし、あまり高く登ると転げ落ちて大怪我をする危険があった。
というのも、中腹から上に行くほど山の斜面は角度が急になってい
たし、高度が増すにつれて積み重なるガラクタが減っていくので、
上からの圧力が減っていき、上層部のガラクタは崩れ落ちる危険性
が増えるのだった。

どつちにしろ、そんな危ないところへ登っていく子供はまず、い
なかった。

だから、ちんくり「誰も知らない秘密基地に連れて行ってあげ
る」と言われて付いて行ったときは、山の中腹を超えてもずんずん
高く登っていくものだから、僕はだんだん不安になってきた。

「あぶないよ」「へいき」「ねえ、あぶないよ」「へいき」そん
なやりとりを何度も交わしながら、ちんくりの後に必死で付いて登
った。

ガラクタ山で遊ぶ子供達なら誰でも『絶対に下を向いてはいけな
い』という山のルールを知っている。下を見たら最後、足がすくん
で登ることも降りることも出来なくなるからだ。

実際、時々そういう子が居て大声で泣きわめいてたりする。そん
な時は、泣き声を聞きつけた年長の子供が駆けつけて、背中におぶ
って降ろしてやるのがガラクタ山での慣習となっていた。

でも、あまり高く登ると年長の子も助けには来ない事になっていく。重大なルール違反だからだ。大きなケガをしたり死んだりでもしたら、そのガラクタ山は”本当の”立ち入り禁止になってしまう。それは絶対に許されない事だった。

そうなれば、近所の子供の聖域とも言える大切な遊び場を無くすことになるし、その原因を作った子供は二度と仲間には入れてもらえない。そして大人になるまで徹底的にいじめられる。

僕はそんな目に逢うのは絶対に嫌だった。だから大声でちんくり「あまり高く行っちゃいけないんだよ」って注意した。ちんくりもそれには何も言い返さなかった。それは本当の事だったから。だからちんくりは黙って登った。

汚く茶色いシミの浮いたポリタンクが埋まっっていて、それに足を掛けた。でもそれは埋まっっているのではなく、殻の一部が地面に載っていただけだった。ポリタンクは僕の重みでするとすべり落ちていく。重心をかけて踏んだ足は後ろへ引かれ、円運動を描いて何も無い空中を蹴りあげた。バランスを失った僕は両腕をぐるぐる回して踏ん張ったけど、だんだん後ろへ倒れていくのが判った。

「落ちるっ！」

とっさにある物が目に入った。そのサビで岩のように膨らんだ針金の塊へ両手でしがみつく。幸いそれはしっかりと地面に埋まっていた。

ポーン　ポーン　ポコン　ポコン　って音が下から聞こえて遠くなっていた。やがて聞こえなくなると、ガラクタ山で二つに引き裂かれた上空の大風がびゅおっ、びゅおっとうと耳元で鳴った。

さっきのポリタンクがどこまで落ちていったのか気になったけど、下を見るなという”山のルール”がやっとの事で僕を抑えた。

見上げるとちんくりが振り返って僕を睨んでいた。「何か落とさないでよ、ばか。他の子にバレるじゃん」と言われた。

「だって、足を乗せたら落ちちゃったんだ。しょうがないじゃないか」

「あたしが足を乗せた所へ足を乗せれば？」

「君のとおんなじ所に？」

「そう」

それだけ言うと、ちんくりはまた登り始めた。僕は今更一人で降りる勇氣もなく、しぶしぶ後を追った。

言われたとおりちんくりの、何度も革で切り貼りして修繕したゴツゴツのまるで女の子らしくない靴底が踏んだのと同じ場所へ（それは大抵、地面に深く刺さっていそうな鉄のパイプとか骨組みだった）必死に足を伸ばした。実際そこはしっかりしていてちつともぐらつかなかった。僕は改めて、ちんくりは凄い子だなって思った。

ちんくりの、靴と同じくらいまっくろなふくらはぎは、何かを踏み超える度にきゅつと引き締まり、棒のような身体を苦も無く上に上にと運んでいった。

ガラクタ山で男の子と一緒に遊ぶ女の子達が皆そうであるように、ちんくりも短パンにTシャツという男の子の様な格好だった。だいたい、いつも強い風が吹くガラクタ山をスカートなんかで登ろうって女の子がいたら、みんなその子の後ろへ回って眺めて、指をさしながらいい笑いものにするはめになるのだ。（理由は詳しく言う必要もないだろう）

ガラクタ山で遊ぶ子供は皆身体が真っ黒になるけど、ちんくりは誰よりも真っ黒だった。

身体を曲げたり伸ばしたりする度にシャツと短パンの裾から見え隠れする肌の白さにぎょつとした。あんな白い肌の女の子は、ガラ

クタ山等へ行かないスカートの子たちの中にも見かけなかった。僕は、その白い肌はどこか見覚えがあった。

それは、そう、小さい頃に出かけて行った『うつくしい街』の子供達の透き通るような肌の色を、どこか思い出させた。

「ごり」と、嫌な音がした。足元をみると、コンクリートから突き出た黒太い針金に、むこうずねから引つ掻き取った僕の皮膚がくちやくちやくとちじまってくっ付いていた。むこうずねに太く浅く掘られた傷から血がじわーっとにじみ出てきた。じりじりつと痛み。ちりちりつとした熱さ。

「いひっ！！、い、いたいいたいっ！！」

「ああそこ、針が出るから気をつければ？」

「もつと早く言つてよっ！！」

ちんくりは振り返ると、今にも泣きだしそうに顔をゆがめた僕の顔を見て、ケラケラと笑った。

「おーっきな赤子がこーおろんだあ、けーえがしたあ、ちーいでるぞお、なきだすぞお、なきだすぞーお。あははは！」

「泣くもんか！」

「いたいくせにい。我慢せずに泣いちゃえば？ ははは！」

「泣かないつてば！」

ちんくりはなかなか笑うのをやめてくれなかった。

ガラクタ山で膝小僧をすりむくなんてのは日常茶飯事だった。その度にいちいち泣いてたら馬鹿にされるし、手足をすりむくのを怖がって長シャツ長ズボンを履いて来ようものなら、仲間から徹底的に軽蔑された。

ガラクタ山でケガをせずに一日を終えるには、結局のところ技術と経験の問題だった。間抜けでノロマな奴はギザギザの鉄板に平気

で手を置いたり無茶な高さから飛び降りて怪我ばかりするから、早々にガラクタ山への出入を親に禁じられる。つまり、ガラクタ山で”生き残れるかどうか”は男のメンツに関わる問題だったのだ。

まして、ちんくりは女の子だった。その黒光りする足にはきつと古傷がたくさんあるだろうけど、少なくともここ半年の付き合いしか無い僕は、ちんくりがケガをしてる所を一度も見た事が無かった。

実際、ちんくりは凄いい子だった。

登る時に手足を掛けるにしても、どこがヤバくてどこがマズイかの見極めが早かった。

『宝探し』遊びの時も、ちんくりは誰よりも珍しい形の機械部品を見つけてきて皆をびっくりさせた。

頭の回転が早くて物覚えがよくて運動神経もいい。くやしけど、ちんくりはいつだって僕の数段上を行っていた。

そのくせあまり威張ることをしないのは、学年の割に身体が小さいからかもしれないけど、たぶん、ちょっと変わり者だったからだろう。

仲間と一緒に遊んでいても、ふっと勝手に居なくなって一人で洞窟を探検してたりする。遊びのルールをわざと破って皆をからかったりする所もあった。それで時々いさかいになるけれど、ちんくりは味方に付けておくと”強い戦力”だったから、あまり大事にはならなかった。

実際、二つのチームに別れて戦う『鉄合戦』や『砦攻め』の時は、ちんくりがいるかどうかで戦況を左右するほどだったのだ。彼女のカンと読みは鋭くて、どんなに堅牢に見える大きな砦も、かならずどこかに弱点を見つけて、早々に崩してしまうのだ。

女の子に対してなんだけど、言ってみればガラクタ山 イ - 4 1 号の”無敵のヒーロー”だった。

でも、ちやほやされると露骨に嫌な顔をするし、チームに入るのも抜けるのも彼女の気分次第。そしてどちらかと言えば、ひとりである事が多かった。遊び仲間としてはいまいち付き合にくい相手だったからだ。

そんなマイペースに生きるちんくりに、なんだって平凡な僕が気に入られたのか、今だによく判らない。

気が付くと僕たちは二人つきりで遊んで居るって事がたびたびあって、それはだんだん増えていった。

もともと男の子みたいな子だったから、変にからかう奴もいなかったし、僕もちんくりの事は気に入っていたので(というより、断る理由がないので)、ちんくりと一緒にいる事に抵抗は無かった。

そんなちんくりの後を追って、今僕は必死で斜面を登っていた。足もくたびれたし、手のひらも擦り切れて血が滲み、ひりひりしていた。だんだん、嫌になってきた。

まだ、着かないのかなあ？。

ふつと横を見た。

すると、子供達からは『おっぱい屋根』と呼ばれている、大工場のお椀を伏せたような丸みの頂上が見えていた。

てっぺんにちょこんと突き出た『ちくび』が見える。ちくびの”屋根”を見るのはその時が初めてで、それは放射状の線が見える傘状の赤い屋根で、中央に避雷針が立っていてー。

その時僕は、”それ”が見える事の意味に気づき、とたんに恐ろしくなった。つまり、もう地上からこれ50メートル以上は登

った事になるのだ。
冗談じゃない。

「ちんくりっ！。もう無理だよ。これ以上登ったら死んじゃう」
「落つこちなきゃ死なないよ。気にしない気にしない」

と、のんびりしたちんくりの返事。それには変に勇気づけられて、
そしてー。

.....。

ーなぜだか判らないけど、ちんくりの一言が妙に、心のどこか
奥へチクリと刺さった。

「着いたよ」「え？」

顔を上げると、夕日をバックにして、大きな鳥が翼を広げていた。

〜つづく〜

〜第二部〜 12：ガラクタ山のちんくり（後書き）

大変長らくお待たせいたしました。

ごく一部に（苦笑）ご好評頂いた『カナリアの妹』、連載を再開させて頂きます。

一生懸命書きます。ご期待くださると嬉しいです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1350k/>

カナリアの妹

2010年10月20日23時30分発行